

## 『群塚神社祭歌』の紹介 ―伝承行為におけるテキストの位置づけに注目して―

熊本県博物館ネットワークセンター

原田 信敬

【キーワード】 群塚神社 阿蘇 民謡

## 第一章 はじめに

本稿で紹介する群塚神社祭歌は、群塚神社(熊本県阿蘇郡南阿蘇村吉田)にて行われる祭の神輿渡御の際に歌われていた歌である。同様の事例は阿蘇地域の神社に散見されるが、代表的なものとして、阿蘇神社の農耕祭事で歌われる「田唄」<sup>①</sup>があげられる。主に神輿の担ぎ手(駕輿丁)が、神社の例祭で歌うものである。<sup>②</sup>これらの歌の系譜関係については不明であるが、いくつかの歌については、阿蘇神社の田唄をもとにしているという言い伝えが残っている。本稿で取り上げる「群塚神社祭歌」についても、筆者が行った二〇一九年の調査で、阿蘇神社の田唄と同じものであるという伝承を確認している。

松永(二〇一二)は、これらの歌を「神輿歌」と位置付けて、それぞれを比較研究している。松永の研究は、阿蘇神社に伝わる「田唄」を例に歌詞から農耕に関する信仰の在り方を探るといふ、従来の阿蘇神社御田植歌の研究方針とは距離を置きつつ、歌詞や音楽的要素を比較分析して、阿蘇神社の「田唄」が「神輿歌」として同地域の各神社に伝播したとしている。

本稿で紹介する「群塚神社祭歌」についても、松永が調査を行っており、祭当日の様子を詳細に記述している。<sup>③</sup>ただし、松永の論考には、歌の伝承行為に関する記述が少なく、群塚神社祭歌の習得までにどのような過程を経

るのかというようなことは明らかではない。

そこで、本稿では、筆者が二〇一九年に調査した際に聞き取った内容と、同様の歌が残っている阿蘇市一の宮町坂梨馬場八幡宮での事例から、歌の伝承行為を分析する。さらに、調査時に得られた資料「群塚神社祭歌」の記述形式から、歌をどのように習得するのかについて考察する。

## 第二章 祭歌の伝承

現在、群塚神社の例祭では神輿幸は行われていないため、「群塚神社宮歌」も歌われることはないが、かつては7月27日の夏祭りの際に神輿行幸が行われ「群塚神社宮歌」が歌われていた。計2基の神輿が出るが、二つの神輿は男女の区別がある。神輿は前日に準備される。前日夜には夜渡神樂が奉納される。決まったルートを神輿が巡る。道中でも道切神樂が奉納されていた。

群塚神社の例祭は、南阿蘇村大字吉田の氏子が例祭を執り行うことになっている。大字内の三つの行政区(吉田1区、吉田2区、吉田3区)が分担して行っている。役割分担は年番になっており、3年で一周することになる。

祭歌を担当するのは、その年に神輿を担当する行政区の男性で、必要な人員は交代要員含めて60人程度だったという。男神輿がオロシと呼ばれる前

句を歌い、女神輿がウケと呼ばれる後の句を歌う形態となっている点が特徴である。

祭に際して歌の練習期間が設けられていた。練習は師匠役である年長者が新入りを一対一で指導する形であったという。

師匠役が灰皿をたいてテンポをとりながら、新入に歌わせ、間違った部分を指摘し、再度歌わせるような形で指導が行われた。練習は度々厳しいもので師匠役の前では正座しながら指導を仰いでいたという。練習の期間は2週間ほどであり、その後、歌を担当する人の選抜が行われる。選抜後、担ぎ担当と歌を担当する人に分けられる。

松永(二〇二二)の調査時は既に、実際に祭歌が歌われることはなくなっており、代わりにカセットテープで録音したものを流していたという。

筆者が調査した時点では、祭において神輿行幸そのものが行われなくなっており、当然のことながら歌をカセットテープで流すようなこともなくなっていた。

一方で、同様の歌が現在まで残っている馬場八幡宮でも、青年会が中心となり、祭の一週間ほど前から練習を行う。(原田 二〇二〇年)かつては、団員の家で練習を行っていたが、現在は、公民館で行うようになっていた。練習方法は、群塚神社のように1対1の指導ではなく、会員が車座になり、青年会長が叩く拍子木に合わせて、全員で歌っていく。その際には、歌詞を記載した冊子がテキストとして配られる。二〇一九年に行われた最終日の練習では、一通り流した後、改めて確認したいところを繰り返し歌っていた。現在のメンバーはほとんどが既に歌を習得しているため、旋律と歌詞を確認する程度のものであった。

このように、歌の習得は、神輿を担ぐ集団内で行われ、一定の練習期間が設けられる。

練習は他の芸能のように長期にわたるものではないが、年長者から指導を

受けて年少者が歌を覚えていく。また、その形態は年長者が実演したものを真似るような形態のものであり、年長者の技術を反復練習する。

また、群塚神社と馬場八幡宮に共通しているのが、歌詞をまとめたテキストが存在することである<sup>4)</sup>。前者については次章で紹介するが、馬場八幡宮の場合、歌詞を確認しながら練習を行うことになる。ただし、これらの歌はテンポを非常に長くとり、拍を引き延ばして歌うため、歌詞を見ただけでは、どの箇所を周りが歌っているのかは、判断することが難しい。

実際、馬場八幡宮での調査では、青年会の人にどこを歌っているのか指さしてもらわなければ、筆者が歌詞を追うことは難しかった。

このように、歌唱における実際の発声方法と歌詞の間にはギャップがあり、歌を習得するためには、独特の歌唱方法と歌詞を結びつける必要がある。そのような努力が次章で紹介する資料から読み取ることができる。

## 第二章 資料「群塚神社祭歌」の概要

当該資料は、筆者が二〇一九年十一月に行った南阿蘇村吉田での調査時に、資料として収集したものである。

タテ型の冊子形状のもので、表紙にはテプラで作成した題が貼り付けてある。「群塚神社祭歌」と記載されており、上部2カ所をホッチキスで留めている。裏表の表紙2ページと本紙8ページ(内2ページ空白)で構成されている。表紙以外は他の資料からコピーしたようになっており、もともなかった別の資料が存在するものと思われる。元の資料について詳細は不明だが、字形から元の資料は、謄写版で印刷されたものと考えられる。またそれ外に、謄写版での印刷後に補足として筆記具で書き込まれたと考えられる部分が散見される。(図参照)

内容は、歌は計六つに分かれており、それぞれ諸登女、熊野、朝霧、矢造、田之神、学納メと題がつけられている。以下に実際の資料の内容を示す。

【凡例】

- ・翻刻にあたっては、原史料の体裁に従うこととしたが、余白等の体裁については、一部変更した箇所もある。
- ・原資料では、フリガナが付されているが煩雑さを避けるために、原則省略した。ただし、通常と読み方が異なる箇所についてのみフリガナを付した。
- ・漢字の字体は原則として原資料に従ったが、文字コードの登録がないものは異体字で代替した。
- ・判読できなかった文字は□で記した。

〔1ページ〕

空白

〔2ページ〕

諸登女<sup>シヨトメ</sup>

- 一、諸登女 御前ノ社権
- 一、野罌<sup>ノケ</sup>ヤ 惣ヤ 社権
- 一、南表ノ 広椽
- 一、沢目ニ 惣ヤ 社権
- 一、<sup>↑</sup> 岐 苜<sup>モシモ</sup> 時雨ノ初時ハ
- 一、岐 御経葉木 哆々<sup>タタラメ</sup>羅目
- 一、岐 御経葉木 何ヤロウ
- 一、岐 墨、硯、筆 ヤロウ
- 一、岐 筆ノ軸 何ヤロウ

〔3ページ〕

熊野

- 一、岐 豊明<sup>ホケキヨウ</sup>経ノ帽子ヤロウ
- 一、豊<sup>ホウ</sup>辺ヤ 書イタル 稚児モヤス
- 一、豊辺ヤ 読ンダル 稚児モヤス
- 一、豊辺ヤ 何ヲ 書キソル
- 一、豊辺ヤ 文ヲ 書キソル
- 一、豊辺ヤ 辻占<sup>ツツラ</sup>ニ 書キソル
- 一、豊辺ヤ 茄<sup>カケゴ</sup>希盆ニ書キソル
- 一、熊野ニ詣ル 松葉ケ関 露沙<sup>ロシヤ</sup>
- 一、沖<sup>クガ</sup>ニ三隻 何分
- 一、丘カラ 誰ヲ招ク
- 一、船頭殿ヲ招ク
- 一、従妹<sup>デ</sup>モマンタ 乗セマイ
- 一、銭ヲ取ラズハ 乗セマイ
- 一、船ニハ 何ヲ 積ミソル
- 一、岐 御馬ニ乗ツタモマートイタ
- 一、岐 儀重<sup>ギチヨウ</sup>打ツタモマートイタ
- 一、何レガ 熊野カ ホーホンド
- 一、ウ<sup>へ</sup>ンホーホーホー
- 一、ヘンヘンヘンヘンヘンヘン
- 一、ク<sup>フ</sup>ーフンフンフー
- 一、フウー マーンハハアア
- 一、ノ<sup>ー</sup>ホンホニー マーハ
- 一、ハ<sup>ン</sup>ーハアアア ハアアア
- 一、イ<sup>ン</sup>ンヒイイール
- 一、マ<sup>ー</sup>ンハツバーンハガセキ

一、竹ノ折戸ガ ホーホンド

朝霧

一、朝霧ノ 曳ク 代ハ 空何色

一、雲ヤツミモヤツ 撫子ノ葉

〔4ページ〕

一、雉子ガ ホロロト 打チソル

一、キケン ホロロト

ウチソル

一、何ヲ 木陰ニ

ウチソル

一、ナラヲ 木陰ニ

ウチソル

一、豊辺ヤ

雄場ニモ立ツ

一、豊辺ヤ

雌場ニモ立ツ

一、豊辺ヤ

八八ノ峰ニモ立ツ

一、豊辺ヤ

コウホ峰ニモ立ツ

へウンホーホーホーへーへへんへーへへ

ンクーフーフンフー

モーモーモーホーホヤーハーハンツミー

ーヒーミーヒーヒーモーヤー

ハーハンハーハーハンツ

ナーハーハンハーハーハンハーへ

〔5ページ〕

ンハハアデーエーシイコーホー

ホンボンーホーホオーノンホーホー

ハー

家造

一、家主殿ノ 祝言

一、八ッ棟造ノ 祝言

一、ハリト ハシラワ 桑ノ木

一、サスト ナガキワ カヤノ木

一、椽二本ノ 篠竹

一、タルキ ドード ヨーチク

一、豊辺ヤ 雄場ニモ 葺ク

一、豊辺ヤ 雌場ニモ 葺ク

一、豊辺ヤ 何ヲ以テ 縫ウ

一、豊辺ヤ ツヅラヲ以テ 縫ウ

一、豊辺ヤ 何ヲ以テ 捲ク

一、豊辺ヤ □ヲ以テ 捲ク

〔6ページ〕

田之神

「7ページ」

- 一、一ツ謳イテ、此ノ田ノ神ニ 詣ラシヨ
  - 一、神ハ エイラン 田主ハ 植エテ悦ブ
  - 一、龍ハ 鷹森 立タヌハ 野部<sup>ヤベ</sup>ノ霜市
  - 一、歳ハ 六十デ 心ハ 峰ノ若松
  - 一、局 チヨイト出テ ツツジノ花ヲ 眺ムル
  - 一、物ノ美事ハ タカモリシチヨウノナエ杉
  - 一、吹ケヤ 浜風 ナビケヤ 竹ノ若枝
  - 一、未ダモ 見事ハ 西山寺ノ ウノ花
  - 一、月ニ六歳 経セ□野部ノ下市
  - 一、猶モ見事ハ 霜野ノ狩ノ 御支度
  - 一、連レテモゴザレヤ 吉田ノ鐘ハ 今搗ク
- ハヒーヒーヒートーホーホーホーホー  
 ホホ ホーンホホツーフーフー  
 ウーフンフーフウターハンハハハン  
 ハーハーハイーヒーヒンヒヒイデー  
 コーホーホンホーホーホンホ

ンホーホーノーホーホンホ  
 ホ ンホホーダーハハハンハハハハン  
 ハーハーハン ハーハーハン ハハン  
 ハハーノー  
 ホーホーホーへーへんー へーへー  
 へんカー カーハハハンハハハ

ハンハーン ハアーリヤハンカ  
 ハンハンハハハ ミーンヒーヒン  
 ヒー ミーヒーヒンヒー  
 ヒーヒン ヒーイヒーヒン ヒーイ  
 ヒーヒン ヒンヒイヒンヒーイミイ  
 ニイエーへーへんへー マー  
 ハーハンハハハハンハ  
 ンハハハハハハハハハ  
 ハーハハハハハハハハハ  
 ハンハハハハハハハハハ

花ノ明神サンニ  
 何時モ樂ハ大船

「8ページ」

空白



図1 「群塚神社祭歌」表紙

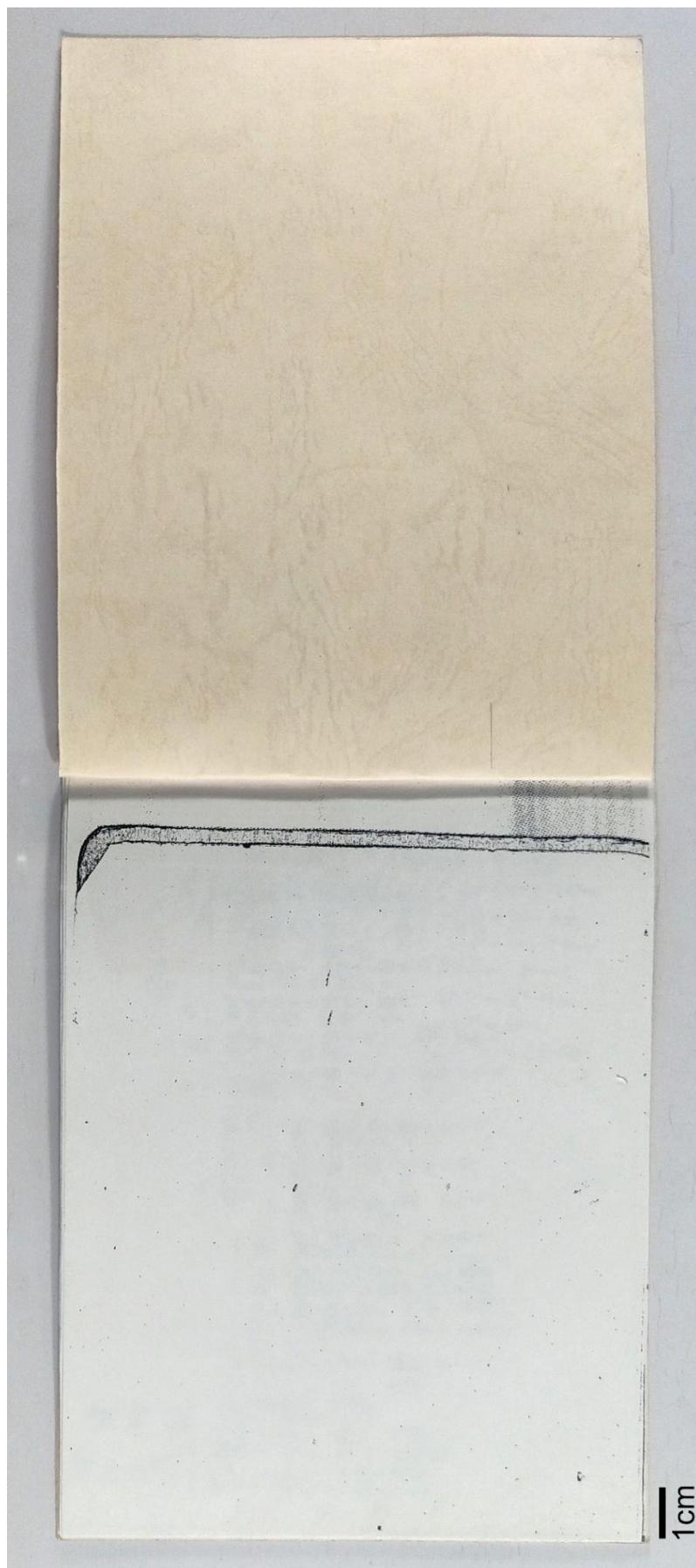


図2 「群塚神社祭歌」表紙ウラ、1ページ









図6 「群塚神社祭歌」 8ページ、裏表紙ウラ



図7 「群塚神社祭歌」裏表紙

### 第三章 『群塚神社祭歌』の記述方法

『群塚神社祭歌』の内容は、先に示した通りであるが、特徴的な記述として、歌詞の下部などに、別途カタカナで記載されている部分である。これは各パートの冒頭部分を、実際の歌唱方法に近い形で表記したものである。例えば、資料2ページ目冒頭「熊野ニ詣ル松葉ケ関キ」という歌詞を実際の歌唱方法に基づいて記述したものが、左のように改めて記述されている。傍線及び括弧内は筆者補足

(くまのに)

クーフーフンフーフー フウー マーンハハアー ノーホンホニー

(まいる)

マーハ ハンハアアー ハアアー イーンヒイイルー

(まつばがせき)

マーンハツバーンハガセキ

このように、各パート冒頭の一節をカタカナで記述することにより、歌詞だけでは表現することが難しい、歌唱方法の記述が試みられている。

先述した通り、『群塚神社祭歌』の記述的な特徴として、歌詞のみではなく、歌唱方法を記述している点があげられる。この点から資料が単なる歌詞の記録を目的としたものではなく、練習行為を前提としたものであり、歌の教授や習得を補助する目的をもって作成されたと考えられる。また、実際の神輿渡御においてどの歌を歌うのか、また、どのように歌うのかについても、注釈や補足が細かくつけられている。(図参照)

### 第五章 まとめ

今回紹介した『群塚神社祭歌』は、単なる歌詞を記録したテキストではなく、歌の練習・習得という実際の行為の中で使用されたテキストである。

その記述方法から、歌の反復練習だけが歌の習得の方法ではなく、歌唱方法を五線譜以外の方法で記述する方法が存在していることが明らかになった。個々人はそれらを参考にしながら歌唱方法と歌詞のギャップを補完することにより、歌を習得していたと考えられる。また、祭当日の動きを前提として注釈がつけられており、この資料自体が、祭という実践を前提とした手引書であったと考えられる。

本稿では記述形式に注目し、歌の習得方法についてささやかながら考察を試みた。同様の資料についても歌の実演や練習という具体的行為の中に位置づけることにより、歌の伝承の方法や過程を射程にとらえることができるのではないだろうか。

### 註

(1)熊本県教育委員会(1988年)の報告に基づく、田植えの際に歌われる歌と神社の祭で歌われる「田歌」の間には、詞型および歌詞の面で共通点がほとんど認められない。熊本県教育委員会の調査報告書では、旋律は採譜されておらず、調査時の録音テープも行方不明になっているため、音楽的な比較はできないが、自分が2019年に南阿蘇村久木野地域で聞き取りを行った調査の経験に基づけば、歌唱法も全く異なっており、別系統の歌であると考える。筆者が調査で歌詞を収集した阿蘇郡南阿蘇村の田植え歌の歌詞を示す。

- 1 西が暗いが 雨ではないか アラナー ないか  
雨じゃござらぬ ヨイガセ よなぐもり ナー
- 2 腰の痛さよ この田 アラナー長さ

四月五月の ヨイガセ 日の長さ ナー

3 四月五月の 日の アラナー 長さ

さぞや嫁もちや ヨイガセ 眠ござろ ナー

4 姉がさすなら 妹とも アラナー ささじや

おなじ蛇の目の ヨイガセ 唐傘を ナー

5 今日の田植は 親方 アラナー なしで

もはや止めごろ ヨイガセ 上がりごろ ナー

(2) 松永は駕輿丁が歌うことに注目して「神輿歌」という言葉を用いたが、歌は必ずしも神輿渡御を伴うわけではない。具体的には、阿蘇神社の踏歌節会、柄漏流神事では、神輿渡御を伴わない形で田唄が歌われる。

(3) 群塚神社の神輿歌について、永松（二〇一二年）は、現地に伝わる歌詞資料を整理し、原本は不明としつつも同地に伝わる「高山本」を底本として翻刻を示している。本稿で紹介した資料を松永が確認しているかは不明だが、「従妹」という記述が共通することから、永松が補筆資料として挙げている「高山改訂版」が今回紹介した資料に近いものと考えられる。

(4) 馬場八幡宮のテキストは、歌詞のみを仮名交じりに書いたものであり、A4版の冊子形式であった。こちらは墨書の原本とコピー本が併用されており、練習時に配布されるものである。

### 引用・参考文献

- 熊本県教育委員会『熊本県文化財調査報告第九七集 熊本県の民謡―熊本県民謡緊急調査―』（熊本県教育委員会、一九八八年）
- 佐藤征子『一の宮町史 神々と祭の姿』（一の宮町、一九九八年）

竹本宏夫「肥後国阿蘇宮御田植祭礼田歌について―その背景と基礎考察―」（『下関市立大学論集』下関市立大学学会、一九八一年）

原田信敬「現代における民謡の展開―熊本県下の田植歌を事例に―」（『熊本大学文学部総合人間学卒業論文』、二〇二〇年）

本田安次「阿蘇宮の祭歌について」（『田歌研究』名著出版、一九六二年）

松永健『阿蘇の神輿歌』（熊日出版、二〇一二年）